

『太極図説』における「人」（配付用）

林 文孝（立教大学文学部）

【レジュメ】

はじめに

本報告の役割：「人間のアイデンティティ」について伝統中国ではどのように語られてきたのか→西洋思想とは異なる語り口のもとでの「人」をめぐる問い？

用語の問題：「じん人かん間」は古典中国語では「世の中」→「人」という言葉に即して考える。

内容：しゅう周とん敦い頤（1017～73、号はれん濂けい溪）『たい太き極く図ず説せつ』の内容紹介と若干の考察

『太極図説』は、「宋学」の誕生を告げるとともに、その核心をなす世界観を集約的に表した重要著作として、東アジア世界で長らく尊重されてきた→伝統中国思想の一つの集約的表現。

1. 『太極図説』をめぐる諸問題【詳細は資料1参照】

- ①道教・仏教由来説（cf. 吾妻 2004、pp.22-49）
  - ②周程授受神話（cf. 土田 2002、pp.115-31）
  - ③しゅう朱き熹による尊崇（cf. 小島 1999、pp.140-60）
- 本報告では深入りしない。

2. 『太極図説』の概要と「人」の位置【詳細は資料2・3・4参照】

「太極図」への解説としての『太極図説』（以下、適宜『図説』と称す）  
朱熹・りょ呂そ祖けん謙共編『近思録』に最初の条として収録→多くの解説文の存在。ここでは、朱熹『太極図説解』（朱等主編 2002、pp.63-86）に従って解釈していく。

2.1 「太極図」と『太極図説』前半

第1位：「無極にして太極」、理としての「太極」。

第2位以下：陰陽五行の気と太極の絶妙な融合により、万物が生み成される。

2.2 『太極図説』後半と「人」の位置

万物における人の優秀性（「五行の秀気」・「万物の霊」を踏まえる）。「太極図」の世界構成の体現。

聖人が「中正仁義」によって人の多様化と混乱を收拾、「静」を基本的態度として「人極」（人の標準）を確立し、人々はそれに従って生きる→天地と並び立つ人（「三才」の観念）。

### 3. 『太極図説』において「人」とは何か

#### 3.1 「万物の霊」

人が優れている所以？→気の「偏正」・「清濁」の曖昧さ。現に人が持っている特徴（身体の形状、心の靈活性）を基準とした人間中心主義。定義としては循環に陥る。

#### 3.2 「三才」

伝統的「三才」思想における「人」独自の貢献とは？→「さい裁せい成ほ輔しょう相」・「さん参さん贊」（天地自然の運行の不備な点を調節し、補完・賛助すること）。

『図説』では、「人」の内容・役割が聖人という特殊な人の能力に依存。

→以上から、『図説』での「人」：世界そのものの存立と相関的に、相対的要素をはらんで成り立つ一つの位置づけである。

### 4. 『太極図説』と現代

『図説』の理論は、「人」の定義としては曖昧だが、無価値ともいえないのでは？

最も優れた存在であり天地を補完する存在であるという位置づけ→科学技術の無際限な追求を促進する可能性

世界の根元的原理である「太極」に貫かれた存在という位置づけ→世界に埋め込まれ、世界の一部として生成変化し続ける存在。世界破壊的であってはならないという要請が伴うだろう。（cf. 聖人の基本的態度としての「主静」：「無欲」により実現）

いずれにしても、世界に人というものが存在してしまった限りは自らに課し続けざるを得ない一種の役割を示しているだろう。

#### 参考文献

吾妻重二（2004）『朱子学の新研究』、創文社。

小倉紀蔵（2012）『入門 朱子学と陽明学』、筑摩書房。

小島毅（1999）『宋学の形成と展開』、創文社。

土田健次郎（2002）『道学の形成』、創文社。

西順蔵（1995）『西順蔵著作集 第一巻』、内山書店：「教学の世界」（1940）、「周濂溪の聖人説」（1954）収録。

荻原拓（1935）『周濂溪の哲学』、藤井書店。

平石直昭（1996）『一語の辞典 天』、三省堂。

山田慶児（1978）『朱子の自然学』、岩波書店。

朱傑人・巖佐之・劉永翔主編（2002）『朱子全書』第13冊、上海古籍出版社・安徽教育出版社：『太極図説解』収録。

〔付記〕本報告は、JSPS科研費JP16K02160（研究代表者：恩田裕正）の助成を受けた研究成果の一部である。

## 【資料1】 報告第1節『太極図説』をめぐる諸問題」詳細版

### ① 道教・仏教由来説

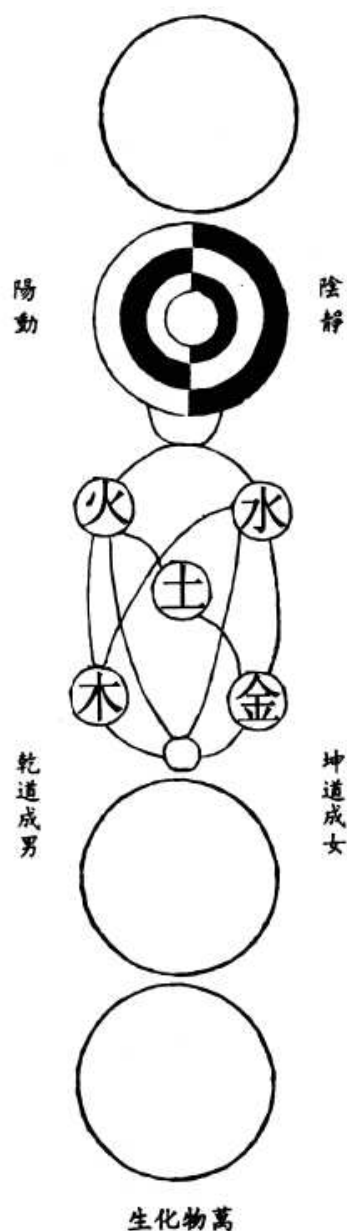
『図説』は「太極図」の解説であり、図ともども周敦頤の作とされる。ところが、図については、元来は道教あるいは仏教の図像であったのを、周敦頤が盗用し換骨奪胎したとの主張がなされ、学界では強い影響力をもつ。この説を唱えたのは清朝考証学草創期の学者たちであり、朱子学の権威を剥奪するために脱神話しようとの意図が明らかであった。こうした偶像破壊的情調は近代文献学の志向性ともマッチしていたのだが、近年、吾妻重二により、むしろ周敦頤作の図が道教に受容された等とする説得力ある見解が示されている。

### ② 周程授受神話

周敦頤は、「宋学」の重要思想家である程顥・程頤兄弟、いわゆる「二程」が十代の頃の師である。そのことから、『図説』についてもこのとき二程に伝授されたとの理解のもとに、やがて朱熹（朱子）にまで至る宋学のオーソドキシイが系譜化されるに至った。しかし、このような授受が事実ではあり得ず、後世に神話化されたものにすぎないことは、土田健次郎によって明らかにされている。

### ③ 朱熹による尊崇

周敦頤の存在が大々的にクローズアップされるのは、朱熹が自らの理気二元論を裏づけるのに格好の枠組みとして『図説』を見出したからである。それに先立って、地元の先人として周敦頤を顕彰する湖南出身者の機運があり、朱熹はこれら湖南の学者と密に接触しながら自らの思想を形成していた。朱熹は、この思想形成のプロセスで『図説』と出会ったのであろう。彼の尊崇ぶりは、自ら注釈書を著したこと、呂祖謙と共編した『近思録』でも巻1の冒頭に『図説』全文を掲げ、初学者には難解すぎるとの意見には、たとえそうでも最初に真理の全体像を提示すべきだとの持論を譲らなかったことなどからも明らかである。ただし、朱熹は、『図説』の解釈上重要な冒頭一句について自説に都合の良い校訂を行った嫌疑があり、陸九淵との書簡による論争ではこのことが問題化されている。こうした事情については小島毅が跡付けている。



## 【資料2】 「太極図」

(右図参照：朱等主編 2002、p.69)

【資料3】 『太極図説』全文と朱熹『太極図説解』(朱等主編 2002、pp.63-86)による試訳(本文中、[ ]内は原注。仮に段落番号を付す)

①無極而太極。

無極なる(知覚対象となるものがない)ものとして太極はある。

②太極動而生陽、動極而静、静而生陰、静極復動。一動一静、互為其根。分陰分陽、両儀立焉。

太極のもと、動きがあれば陽を生じ、動きが極点に達すると静まる。静まると陰を生じ、静止が極点に達すると再び動く。動いたり静まったりして、お互いにお互いの根となる。陰と陽とに分化していくことにより陰陽二項からなる両儀が成立する。

③陽変陰合、而生水・火・木・金・土。五氣順布、四時行焉。

陽と陰とが変化し融合することで、水・火・木・金・土を生じる。これら五つの気が順次に展開していくことにより四つの季節がめぐっていく。

④五行、一陰陽也、陰陽、一太極也、太極、本無極也。五行之生也、各一其性。

五行は陰陽以外のものではなく、陰陽は太極以外のものではなく、太極が太極たるゆえんは無極であることだ。五行が生じると、それぞれがそれぞれの性質をもつ。

⑤無極之真、二五之精、妙合而凝。「乾道成男、坤道成女」、二氣交感、化生万物。万物生生、而变化無窮焉。

無極なる真理と陰陽五行の精気とが隙間もなく融合して一つの形へと凝結する。(『易』繫辭上傳にあるとおり)「天の原理である乾の道が男性性を形成し、地の原理である坤の道が女性性を形成し」、これら二つの気が交感して、その変化により万物を生み出す。万物は次々に生み成して、変化は窮まることがない。

⑥惟人也、得其秀<sup>1</sup>而最靈<sup>2</sup>。形既生矣、神発知矣、五性感動、而善悪分、万事出矣。

人だけが、気の中の優れたものを得たために心の働きが最も自由自在である。肉体が誕生するとともに、精神が活動して知が働き出す。五行に対応する五常(仁・義・礼・智・信)の性が物に揺さぶられて動き、善と悪とがそこから分かれ、あらゆる事が出来る。

⑦聖人定之以中正仁義、[聖人之道、仁義中正而已矣。]而主静、[無欲故静。]立人極焉。故「聖人与天地合其徳、日月合其明、四時合其序、鬼神合其吉凶」。

聖人はこの状況を中正仁義によって落ち着かせ、[聖人の道は、仁義中正にほかならない。]静かさを基軸とし、[無欲ゆえに静かになる。]人の標準を確立する。それゆえ、(『易』乾卦文言伝にあるとおり)「聖人は天地と同様

1 『礼記』礼運篇に「人者天地之徳、陰陽之交、鬼神之会、五行之秀気也」とある。

2 『尚書』泰誓上篇に「惟天地、万物父母。惟人万物之霊」とあるのなどが踏まえられて

2 『尚書』泰誓上篇に「惟天地、万物父母。惟人万物之霊」とあるのなどが踏まえられている。

の徳をもち、日月と同等に明るく、四季と同様に秩序立ち、鬼神と同じように吉凶を示す」と言われる。

⑧君子修之吉、小人悖之凶。

君子はこのことに励むことで吉となり、小人はそれに背くことで凶となる。

⑨故曰、「立天之道、曰陰与陽。立地之道、曰柔与剛。立人之道、曰仁与義。」又曰、「原始反終、故知死生之說。」

それゆえ、(『易』説卦伝にあるとおり)「天の道を立てて陰と陽といい、地の道を立てて柔と剛といい、人の道を立てて仁と義といった」と言い、また(『易』繫辞上傳にあるとおり)「始めを探求し終わりを顧みることにより、死生の説明がよくわかる」と言うのだ。

⑩大哉易也、斯其至矣。

偉大なものだ、易というものは。これほどまでに無上のものだ。

#### 【資料4】 報告第2節「『太極図説』の概要と「人」の位置」詳細版

##### 2.1 「太極図」と『太極図説』前半

「太極図」を見てみよう。これは上から下へと見ていく。その流れにそって、『図説』の前半部分が各位置の図を解説している。

第1位は単なる円である。対応する解説は「無極にして太極」(②)。そもそも「太極」とは、『易』繫辞上傳以来、世界の根元を意味する言葉であった。それを表すに際して、周敦頤は始めに円を置き、「無極」と形容する。その意味は、朱熹によれば、知覚可能な形状的要素をもたずどこが中心(「極」とも定めることができない様相であり、仮に図として円に描いたまでのことである。朱熹の用語でいえば「氣」に対する「理」のレベルであり、「用(作用)」に対する「体(本体)」のレベルである。つまりは、氣や用として具体的に展開される知覚可能な世界に対して、それを支える秩序原理のレベルを表している。

第2位は、円環の左半分が易の八卦のうち火を表す離(☲)に対応し、右半分が水を表す坎(☵)に対応する。陰陽の陰を黒く、陽を白く表して、ちょうど真ん中で陰陽が交代するように両者を結んでいる。左側に文字として「陽動」、右側には「陰静」とあり、『図説』ではまず次のように言われる。「太極動いて陽を生じ、動くこと極まって静なり。静にして陰を生じ、静なること極まって復た動く」(②)。これは一見、「太極」というものが直接動くかのようだが、朱熹によれば違う。太極という原理に統括されたこの世界には、活動的的局面と沈静的局面とがおのずから出現し交代する。活動的な局面が陽と称され、沈静的な局面が陰と称され、それらがお互いの根となるようにして交代循環する。動いたり静まったりするのは、太極という理そのものではなく、太極を本体とする氣の領域であり、それが知覚可能な世界として現実的に作用しているのである。図においては、三重の白黒の円に取り囲まれた真ん中の小円が本体を表しており(『解』)、本体と作用との一体不可分性を示している。以上の解釈から読み取れる朱熹の意図としては、『図説』から生成論的な解釈を遠ざけ、理氣二元論による存在構造論として解釈させるものといえよう。

第3位は陰陽よりも具体的なかたちで多様性を現出させる要素となる五行の成立とその相互関係を語る。第4位は、以上の無極なる根元的原理に支えられた陰陽と五行の絶妙な錯綜融合（「妙合」）を通して、男性的なるものと女性的なるものとがそれぞれ気の凝集体として形成されることをいう（「氣化」）。第5位は、かくして成立した男性性と女性性の交合によりあらゆる物（「万物」）が生じていくことをいう（「形化」）。いずれも総体としてのこの世界のありようを表示するものであるから、太極そのものを表す第1位と同様の円圈を用いて表される。

## 2.2 『太極図説』後半と「人」の位置

『図説』後半で述べられるのは、万物の中でも人が最も優れているとされる理由と、人の中でもとくに優れた存在である聖人が人の標準を定めるとされるその内容と効能と位置づけであるといえる。

人は万物の中でも特殊な存在である。「其の秀でたるを得て最も靈なり」(⑥)とは、陰陽五行の気の中でも最も上質な部分から人が形成されていること、その結果として、人の心は最も自由自在な能力を獲得していることをいう。すでに先学により指摘されているとおり、「秀」については『礼記』礼運篇、「靈」については『尚書』泰誓篇などが典拠として踏まえられている。後者は「万物の靈長」という言い回しにも直結するもので、これらを踏まえた『図説』は、伝統中国における人の特権性をめぐる語り方の一つの典型例となっている。そのうえで、こうした人のあり方が、「太極図」の語る世界構成をそのまま体現するものとされる。たとえば「形」（肉体）は陰から生じ、「神」（精神）は陽から発し、人が性質として備える要素は五行に対応し、善と悪は男性原理と女性原理に対応づけられ（伝統思想に多く見られる強固なジェンダー・バイアス）、かくして「万物」に比すべきありとあらゆる多様性が「人」の上に実現される。

聖人とは、人の中でもとりわけ上質な気を受けて生まれた者である（『解』）。それゆえに、太極の道の完全な体現が可能だとされる。その優秀さゆえに聖人がなすことは、自らの行動基準をもとに、善悪万般にまで多様化した人のありように対して人たる者の標準（「人極」）を確立することである。その規範の内容は「中正仁義」と表現され、千変万化する動態的世界に対応する基点として情欲を沈静化させた「静」を基本的態度とすべきものとされる。かくも偉大な聖人の徳は、『易』繫辞上傳にもとづき、天地と一致するほどのものと称えられる（以上⑦）。この位置づけは『易』のさまざまな文言を借りて表現を与えられ、天・地と人とが並び立って世界を構成するという「三才」の思想に結びつけられている。かくして、天も地も人もそれぞれが一つの太極として、陰陽・剛柔・仁義という対立物の相互転化のあり方を備えつつ、あいまって一つの全体世界を構成しているという世界像が打ち立てられる（⑨）。